

# 東日本大震災と「心の花」④ 藤島秀憲

「心の花」一月号では十六人が東日本大震災または福島第一原子力発電所の事故に取材した歌を詠んでいるが、大部分が放射能による健康不安を詠んだもの。そして、原発を詠むときの姿勢のほとんどが反原発である。ただし、原発反対を前面に押し出した作品は主義主張が強すぎて、短歌としての魅力に乏しい。むしろ淡々と事実を歌いつつも原発への怒りが見え隠れする歌に魅かれるものがあつた。

- ・放射能がセシウムがと言ふ子らが声曲がるまで烈しく聞こゆ  
西田 郁人（広島）（二月号）
- ・福島のリんごを今年は送れぬと南相馬の友に詫びらる  
八汐阿津子（鹿児島）（二月号）
- ・憎しみと怒りの言葉の充ちてゆく心の沼に白鳥が来る  
田中 拓也（茨城）（二月号）

西田は原爆を体験している。原子力の恐ろしさを知りつつも原発を食い止められなかったことを悔いる気持ちがあるから、まるで子らに責められているように「放射能がセシウムが」という声が「烈しく」聞こえたのだろう。怒りの矛先は自分にも向いている。八汐は福島産りんごが送られて来ないことを内心安堵しているのかも知れない。だから、詫びる友を余計に哀れと思うのだ。田中の歌、何が原因の憎しみと怒りなのか判らないが、田中の第三歌集『雲鳥』を読んだあとだけに、震災や原発事故に起因して

いるのではないかと推測してしまふのである。

「机の下に頭隠せ」と叫びおり笑う生徒を叱り飛ばして

田中 拓也『雲鳥』「三・一一 臨時避難所」

- ・真つ暗な体育館に届きたるミスタードーナツ約三百個
  - ・眠れざる生徒の顔の鼻水を最後のテッシュで拭いたりたり
- 田中は中学校教師。揺れの瞬間から生徒を誘導して避難所に移り一夜を過ごした約十四時間を五十首の連作にまとめた。直接会話を含む歌が十二首あり臨場感を生む。現場でしかわからない具休も多く織り込まれていて緊迫感のある作品である。

- ・チエルノブイリ事故にもめげず核力を使ひ尽さむロシア見習へ  
佐竹 宏文（東京）（十月号）

事故以来、賛成の立場から歌を作るのは勇気がいることだと思ふ。佐竹は原子力の分野で働いている人だけに、自分の仕事に誇りを持つての一首。一方で「原発の地異の力に抗する技軽んじぬたるを今にして悔ゆ」という歌もある。誇りだけでなく悔いる気持ちも詠んでいることに歌人としての公平さと冷静さを見る。

- ・フクシマの娘は嫁にもらえぬと告げらるる日の近くにあらむ  
駒田 晶子（宮城）（十一月号）

- ・放射能自主検査結果とどきたり汚染米ならば買わざるわれか  
倉石 理恵（神奈川）（二月号）

駒田の歌は、娘を連れて福島に里帰りしたときの作品。軽い歌い方だが内容は重い。推量の助動詞を使っているが確信に満ちたような歌い方である。倉石の歌、結句を「か」で終えているが汚染米ならば買わないことを承知した上での「か」であろう。怒りは諦めに変化しつつある。